

イベリアの夜

峰 万里恵 (うた) ☆ 高場 将美 (ギター)

スペイン・バル *Olé*

2008年5月17日

A noite da Ibéria

La noche de Iberia

1ª parte

1. このおかしな人生 *Estranha forma de vida*

詞・編曲：アマーリア・ロドリゲス 曲：アルフレード・マルスネイロ

ファドは伝統的に、つねに歌詞から音楽が導かれます。この曲では、歌手のアマーリアさんが、まず詩をつくり、男性ファド歌手の最高峰とされるマルスネイロが創案した（楽譜に定着したのは、ポルトガル・ギター奏者の最高峰といわれるアルマンディーニョ）《ファド・バイラード》と命名されたメロディの形に乗せてうたいました。そのさい、原作が決めた起伏の幅などを単純化して、即興の節まわしが自由にできるようにしています。

神様の意思だった——わたしが、このように思いまどいながら生きているのは。そして、すべての「アイ！」はわたしのもの、わたしのサウダー

上も。——神様の意思だった。
(サウダー=失ったもの、そこにはないものへの愛から生まれる、甘美な悲しみの感情をあらわすポルトガル語。ノスタルジーと置き換えられることもあるが、そのニュアンスは他言語に翻訳不可能。ポルトガルの国民感情の根源にあり、ファドを生んだ感情だと言われている。ブラジルでは一般にサウダーヂと発音され、やはり民衆の心の底に流れている感情だと考えられている)

なんという変わった生きかたを、このわたしの心はもっているのだろう。なくしてしまった命で生きている、だれか運命を変える魔法の杖をあげればいいのに——なんという変わった生きかた！

ひとり立ちしている心、わたしの命令をきかない心。おまえは人々のなかで道をなくして生きている、かたくなに、血を流しながら——ひとり立ちしている心。

わたしはこれ以上おまえについていけない。止まれ、鼓動をやめなさい。どこへ行くのか知らないくせに、なぜ走りつづけることに、こだわるのだ？——わたしはもう、おまえといっしょには行かない。

2. つめたい明るさ *Fria claridade*

詩：ペドロ・オーメン・ド・メロ 曲：ジョゼ・マルケシュ・ド・アマラーウ

ポルトガルを代表する詩人のひとりペドロ・オーメンの詩集を読んで共感したアマーリア・ロドリゲスさんが、うたいたくなり、1930年代から活躍した（マルスネイロの伴奏もした）ポルトガル・ギター奏者のつくったメロディに乗せました。詩人はポルトガル北部の出身です。若いころ首都リスボンに出てきたときのことをうたったのでしょう。ファドにされたことに対して、大詩人は怒るところか、「わたしの詩が、より広く知られ、民衆にとどいた」と、アマーリアさんに感謝しています。

あれほどに悲しかったあの日の、澄んだ明るさのまんなかで、大きかった——街は大きかった。そして、だれもわたしを知らなかった。

そのときわたしのそばを通った、ふたつの美しい目が。そのあとで、わたしは思いこんでしまった、結局は夢なのだと、わたしに見えている、ただそのふたつしかない、ふたつの目は。

わたしはすべての感覚の中に、神の予兆を感じた。そしてあのふたつの目は、わたしの目から離れていった。

わたしは目を覚ました。そして、澄んだ明るさは、わたしをもっとつめたく感じさせた。大きかった——街は大きかった。そして、だれもわたしを知らなかった。

3. ポルトガルの船乗り *O marujo português*

詞：リニャールシュ・バルボーザ 曲：アルトゥール・リベイロ

リベイロが作詞作曲した『レモン売りのロジーニャ』というヒット曲がありました。リスボンの街角が目に見えるような、とても魅力あるメロディで、歌詞もすてきなのですが、「ぼくが彼女と結婚できたら……」とか、男性でないと、うたえない内容でした。それではもったいないので、女性のアマリア・ロドリゲスさんがうたうために、彼女のお気に入り作詞家バルボーザが別の歌詞を書いたのが、この曲です。

ポルトガルの船乗りは街を通るとき、歩かない、踊りながら通る、まるで潮の味をふりまいているみたい。

跳んだり揺れたり、なんともおかしな動き。それは人体なのか、ボートなのか、判別できない。

ピカピカの制服を着て、いたずら者の目付き、ねじけてかぶったベレー帽。彼が発明する愛撫から逃れられる女はいない。

乱れた髪はロープの束のようになって、船を停めるいかりの綱にも使えそう。魚売りの女たちは、それが大好き。

リスボンに着くと船から飛び出し、ひとつ跳びで夜の街に入り込み、そこを甲板にしてしまう。ポルトガルの船乗りの中には、いつも大冒険の航海者ヴァシユコ・ダ・ガマが宿ってる。

ポルトガルの船乗りが街を通るとき、それは海が通ること。愛情深い満ち潮の危険をはらんで。

4. 貧しいことは不幸ではない *Não é desgraça ser pobre*

詞：ノルバールト・ド・アラウージョ 曲：《ファド・メノール・ド・ポルト》

作詞者はジャーナリストで、リスボンの祭りに、マルシャ（行進曲）によるパレードのコンクール——ブラジルのリオのカーニバルを真似たのかもかもしれません——を開催して、民衆文化の発展に貢献した素晴らしい人です。「マルシャの発明者」なんて呼ばれています。

メロディは「港の短調のファド」という名前で、作者不明として伝わってきましたが、19世紀のポルトガル・ギター奏者（本業は印刷工）ペドロ・カウシーニャスが作ったという説もあります。

貧しいことは不幸ではない。頭のおかしい女であることは不幸ではない。不幸なのはファドをもっていること、心の中に、そして口の中に。

（ファドは歌のジャンルの名前であるほかに「宿命」という意味ももっています。この曲に限らずたくさんの歌詞で、「ファド」ということは、「歌」と「逃れられない悲劇的な宿命」の両方の意味をかけて使われています）

銀の小さなコインが銅貨よりも値打ちがある。

貧しさはわたしたちを殺しはしない。貧しいことは不幸ではない。

先がどうなるかわからないこの人生では、幸せであるなんて小さなこと。頭のおかしい女は、なんにも感じないのだから、頭がおかしいことは不幸ではない。

生まれたとき、わたしは星をひとつ運んできた。そこには運命がしるしてあった。星を持ってきたことは不幸ではない。不幸なのはファドを持ちつづけていること。

不幸なのは、わたしたちがさまよい歩き、うた過ぎて、もう声もかすれてしまったこと。そしてファドが、かたくなに、ありつづける。心の中に、そして口の中に。

5. アヴェ・マリーア・ファディシュタ *Avé Maria fadista*

詞：ガブリエウ・ド・オリヴェイラ 曲：ヴィアニーニャ（本名フランシーシュコ・ヴィアーナ）

ファディシュタ（ファドをうたう人）ということばは、19世紀なかばには、犯罪者・ならずものと同義語でした。偏見は消えても、底辺の民衆というイメージは長く残っていました。このファド詩人も、たいへんへりくだった気持ちで祈っています。この詩を乗せたメロディは、昔のポルトガル・ギター奏者が作ったものです。

聖なるマリア様にご挨拶、神の恩寵にあふれたお方。こんなちっぽけな祈りにこめた、高くそびえる美しさ。

祝福された女たちのなかでも、選ばれたあなた

のお腹から生まれた果実であり光、イエスに祝福あれ。かぎりない愛と恩寵の化身。

数々の痛みの聖女マリア、神の母。もしファドを弾き、うたうことが罪なのならば、わたしたち罪びとたちのために許しを神に願ってください。

ファディシュタたちは、だれもかれも、運のない者ばかりです。母であり処女であるお方、わたしたちのことをお祈りください。いまも、いつでも、そしてまた、わたしたちの死の時にも。

6. ファルーカ *Farruca*

詞・編曲：マヌエル・トーレ 曲：アストゥーリアス地方ヒターノ民謡

ファルーカはスペイン北西部、ガリーシアとアストゥーリアス地方の女性のことです。この曲は、「ガリーシアでファルーカが泣いていた」という歌詞もありますが、アストゥーリアス地方のヒターノ（スペインのロマ、いわゆるジプシー）がうたいはじめ、それが南西部アンダルシア地方のヒターノに伝えられたものです。同地方のヘレスという街の（もちろんヒターノの）歌手が、民謡をフラメンコ風にうたって大流行させました。19世紀後半のことです。

わたしたちの出発点は、フラメンコ史上最高の表現者のひとりであるマヌエル・トーレさんの、1908年の録音です。この曲調は、今日踊りのバックなどでは、もっと

音楽的に整理されたスタイルでうたわれています。

ファルーカがひとり泣いていた。高い、高い山の頂で。なぜかといえば、番をしていた山羊たちの群れが、道に迷ってどこかへ行ってしまったから。

上のほうにはレモン、下のほうにはオリーブの林。ああ、わたしの命のレモネード、わたしの愛のレモネード。

あの上のほう、あの上でふたりっきり。つらい仕事の終わったあとで……。

7. 星の花束 *Manojo de estrellas*

詞：アレハンドロ・シintas・サルミエント 曲：カルロス・カステジャーノ・ゴメス

フラメンコの最高の《ディーヴァ》だったローラ・フロレスのレパートリーです。作者シintas（1927年ハエン県生まれ、元フラメンコの歌手）と、カステジャーノ（1904年コルドバ県生まれ）のコンビは、ともに独学を誇り（？）にしており、1965年に『月と闘牛』という世界的スーパー・ヒットを生みました。

スペイン歌謡は、多くの場合、まずメロディがつくられ、そこに歌詞をはめてゆくの、ことばづかいが変だったり、無理があったり、意味が繋がらなかったり、不可解だったりします。でも、ひびきとリズムでゴマカされて（！）たいへん魅力的に感じてしまいます。

この曲も欠陥だらけですが、ひびきにだまされて、万里恵さんがうたいたくなりました。地名には、ほとんどなんの意味もなく、音の調子がいいので使われているだけです。

レモンの水、泉がこわれてしまった。わたしには直すお金がない。ああ、なんと悲しいこと！

わたしたちは、どこを歩いて行こう？ レモンの水、レモンの水、空の門を歩いて。

情熱のばら、わたしの花畑の花たちは、悲しみで死んでゆく。月がわたしを見た。わたしは星の花束を贈ってもらおう。わたしたちは、どこを歩いて行こう？ レモンの水、レモンの水、空の門を歩いて。

モレーナ山脈のさまざまな恋、そして風と情熱の恋。悩みで人を殺す恋、裏切りのような恋。わたしは、いろいろな恋を隠してある、ルセーナの野に。あぶみをつけた1頭の馬が、わたしの悩みをなくしてくれる。アイ！ そしてわたしは、いろいろな恋を隠してある、ルセーナの野に。

2ª parte

1. みどりの眼 *Ojos verdes*

詞：ラファエル・デ・レオン／サルバドール・バルベールデ 曲：マヌエル・キローガ

この3人の作者たち（いずれもセビージャ出身）は、1930年代なかばにスペインのポピュラー音楽に革命を起こしました。それまでのスペイン歌謡の主流は、フランスのミュージックホールの歌や、アメリカのポピュラー・ソングのスタイルでつくられていました（もちろん、スペインならではの色や空気は濃厚でしたが）。

この3人は、ヒターノのミックスしたアンダルシアのことばと音楽を全面的にアピール——簡単に言えば、スペイン歌謡をすべてフラメンコの延長線にしてしまったのです。さらにどの曲にも、それぞれのドラマ・物語を織り込みました。彼らは、同名の映画までつくられた「マリア・デ・ラ・オー」に始まって、次々とヒット曲を量産し、その成功に、他の作者たちも追隨して、スベ

インといえばフラメンコ調歌謡という時代がつくられました。その時代は、いまもつづいていると言えるかも。

レオン（1908—82）は最高の「フラメンコ詩人」と呼ばれるにふさわしい、個性的な情熱の表現で、まったく他の追隨を許しません。

バルベールデ（1895—1975）は、小説、レビュー・映画・ラジオ・テレビの脚本も書きました。

マエストロ・（をつけて呼ばれた）キローガ（1899—1988）はオーケストラの編曲指揮もする本物の音楽家で、アンダルシア以外の民俗音楽を使った曲もあります。

『みどりの眼』は、1940年代はじめの曲で、ヒターノの娼婦がうたうという設定が、物議をかもしました。後年、歌詞の一部を書き換えさせられました。

遊び女たちの家の戸口の壁に寄りかかって、わたしは燃え上がる5月の夜を見ていた。男たちは通り過ぎてゆき、わたしはほほえんでいた。そんなとき、あなたがやって来て、わたしの戸口に馬を止めた。

「セラーナ（ジプシー女）、火をくれないか？」
「火は、わたしのくちびるから、取りにおいで」
あなたは馬を下り、わたしは火をあげた。そして、ふたつの、みどり色の、5月の明星になったのだ。あなたの両目が、わたしにとって。

.....

わたしたちは部屋から、朝が目を覚ますのを見た。教会の物見の塔が暁を告げる鐘を鳴らすのを見た。夜明けにあなたはわたしの両腕を残して行った、そして、わたしの口の中には、ミントとシナモンの味を。

2. モウラリアは夜 *É noite na Mouraria*

詞：ジョゼ・マリーア・ロドリゲシュ 曲：アントーニオ・メシュトル

モウラリア（モーロ人街）はリスボンの地区名です。19世紀なかばごろには、売春宿があったので——ふつうの貧しい人々もたくさん住んでいましたが——ファドの中心地のひとつでした。20世紀初めには、さびれてしまい、現在は再開発もおぼつかない、見捨てられた地区です。でも、ファドのふるさととして、夢のなかに生きつづけている？……この曲の作曲者はアコーディオン奏者で、パリのミュゼット音楽やファドをレパートリーにして、ダンスホールなどで活躍していました。

ポルトガル・ギターがひとつ、小さな声で、影になった小路で、古い昔のファドを口ずさんでい

「セラーナ、ドレスのために、君にプレゼントしたい」「あなたはもう義務を果たしている。なにもわたしにしてくれなくていい」

あなたは馬に乗り、わたしから去った。そして、もう二度と、あれより美しい5月の夜を、わたしは見ることはなかった。

みどりの両目、バジリコのようにみどり。みどりの小麦のように、みどりのレモンのように。ナイフの輝きを持ったみどり色、それがわたしの心臓に刺しこまれた。——わたしにはもう太陽も明星も月もない。あるのは、ただふたつの、みどりの眼。それがわたしの命。

（スペイン語で「みどりの眼」というのは、深くて濃く、つやがあって黒く光って見えるような色を指します。昔の日本語で「みどりの黒髪」といったのと似ているかもしれませんが）

る。——モウラリアは夜。

タイジュ河では船が1隻、汽笛を鳴らす。道を通り過ぎるならず者ひとり。だれの口にもキスがひとつ。——モウラリアは夜。

すべてがファド、すべてが人生。すべてが、いきどころのない愛。痛み。こまやかに感じる心。喜び。

すべてがファド、すべてが運命。命と死のモザイク。モウラリアは夜。

3. わたしが小ちゃかったとき *Quando eu era pequena*

ベイラ=バイシャ地方民謡

このポルトガル民謡では、フリギア旋法（ミの旋法）が使われています。フリギアは、グレゴリオ聖歌の旋法のひとつですが、民俗音楽では厳密な意味では使われていません。簡単にフラメンコ旋法と呼んだりしますが、スペインだけでなくポルトガルでも（ファドでも！）重要です。イベリア旋法と呼んだら、どうでしょうか？

わたしが小ちゃかったとき、生まれたばかりの

とき、ようやく両目を開けた。——ようやく両目を開けた。それは、あなたを見るためだった。

わたしがおばあちゃんになったとき、死んだばかりのとき、わたしの両目をよくごらん。——わたしの両目をよくごらん。命をなくして、まだあなたを見ようとしている。

4. ドン・ソリドン *Don Solidon*

ベイラ=バイシャ地方民謡

ドン・ソリドンということばは、標準ポルトガル語ではありませんが、「孤独おじさん」と訳すことができます。この曲は、一般ヨーロッパ音楽のマイナー（短音階）です。

あの女の子をごらんなさい、ドン・ソリドン。なんて、あでやかに歩んでいること！ お下げ髪に手をそえておやりなさい、ドン・ソリドン。ばらの花が落ちないように。

あの女の子をごらんなさい、ドン・ソリドン。なんて、うれしそうに歩んでいること！ お下げ髪に手をそえておやりなさい、ドン・ソリドン。櫛（くし）が落ちないように。

あの女の子をごらんなさい、ドン・ソリドン。なんて、しとやかに歩んでいること！ お下げ髪に手をそえておやりなさい、ドン・ソリドン。リボンが落ちないように。

5. これがファド *Tudo isto é fado*

詞：アニーバウ・ナザレー 曲：フェルナンド・カルヴァーリオ

作者たちは、1940年代から活動した、歌謡ファド（イコール・ポルトガルのポピュラー・ソング）のプロです。世界のどこにもある歌謡曲と同じなのですが、ポルトガルでは音楽的にも、歌詞の内容も、ひと味ちがっていて、やっぱり「ファド」ですね。

わたしの主人になりたいのなら、愛のことばかり語らないでください。ファドの話もしてください。……ファドは、わたしの言うすべてのもの。

6. ラグリマ（涙） *Lágrima*

詞：アマーリア・ロドリーゲス 曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ

アマーリア・ロドリーゲスさん（1920-99）は、いわゆる中年を過ぎたころ、重い病気で毎日ベッドで死と向かい合っていました。そのときノートに、思いつくままに詩を書いていた（明るく楽しい内容のものもありました）。それらに曲をつけてうたうことが、彼女にふたたび生きる勇気を与え、カムバックの原動力になりました。アマーリアさんは、若いころに作詞したこともありますし、他人の作品を、より良いことばに直すこともありました。

「わたしは詩人とは呼べません。でも、いつもうたっているファドの歌詞ぐらいのものは書けます」

——彼女の歌詞は、伝統的な民衆詩の最高レベルの手法を、自然に使いこなしています。多くのプロの作詞家より格が高いです。内容が真実なのはいうまでもなく。

この曲の作曲は、彼女の伴奏をしていたポルトガル・ギター奏者です。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。

7. 黒い船〔暗いはしけ〕 *Barco negro*

詞：ダヴィード・モウラオン＝フェレイラ 曲：カコ・ヴェリョ／ピラチーニ

原曲は《バトゥーキ》と称するアフリカ系リズムをもったブラジルの歌で、作者たちはサンパウロで活動する歌手・ミュージシャンでした（1945年発表）。もとの題は「マンイ・プレータ（黒い母）」とあって、ブラジルの大農場で働いている白髪の黒い老婆が、ご主人の白い赤ん坊のお守りをしていることがうたわれています。この歌詞は現在では、ファド歌手が時にとりあげますが、ブラジル本国ではほとんど忘れられています。

1955年のフランス映画『過去を持つ愛情』（原題 *Les Amants du Tage* タイジュ河の愛人たち）の1シーンで、アマーリアさんがうたうために、この曲に、別の歌詞が付けられました。作詞の専門家ではなくて、ふつうの（？）詩人であるモウラオン＝フェレイラが書きました。ポルトガルやスペインの詩人は、昔から、文字にして読むためではなくて、声に出して耳に伝えるために詩をつくってききましたので、ひびきが良く、ポピュラー音楽の歌詞にもなりやすいわけです。この曲の場合は、詩人が、最初から歌詞として書いたのですが。

そしてまた、わたしの言えないもの。

敗れた魂たち、失われた夜たち、あやしい影たち。モウラリーアでは、ならず者がうたい、ギターたちが泣く。

愛。嫉妬。燃え尽きた灰。ともしの明かり。痛みと罪。——このすべてが、世の中に存在する。このすべてが悲しい。このすべてがファド。

わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだというこんなやりかた。

絶望——わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わたしは刑罰を受けている。あなたがきらい——わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということをおもうとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら——死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしづくの涙——あなたのひとしづくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。

映画でのうたいぶりが感動を呼んで、アマーリアさんというすばらしいアーティストが、そしてファドが——この曲は、純粋なファドとは呼べないのですが——広く世界に知られ、たくさんファンを獲得したわけです。

ちなみに、映画はアンリ・ヴェルヌイユ監督。悲劇の宿命を背負ったヒロインは、当時彼の愛人だったフランソワーズ・アルヌール、相手役男優はダニエル・ジェランでした。

朝、こわかった……砂浜に横たわり、あなたに顔がみにくいと思われるのが不安で、わたしは震えながら目を覚ました。でも、あなたの目はすぐに、そんなことはないと言った。そして太陽の光が、わたしの心に刺しこんだ。

その後、わたしは見た。岩の上に、十字架。そしてあなたの船は、光の中で踊っていた。

わたしは見た、あなたの両手。嵐に吹き飛ばされないように、もう切り離されてしまった帆のあいだで、わたしになにかを告げようと振られていた……。

浜の老女たちは言う。あんたはもう帰ってこない。嘘だ！ 彼女たちは頭がおかしいんだ。

わたしは知っている、愛するひと、あなたはまだ出発もしなかったことを。だって、わたしのまわりのすべてが、わたしに言っている。あなたはいつも、わたしといっしょにいます。

ガラス窓に砂を打ちつける風のなかに——うたっている水の流れのなかに——消えかけている火のなかに——ベッドのぬくもりのなかに——だれもない腰掛けのなかに——わたしの胸のうちに——あなたはいつも、わたしといっしょにいます。

わたしは知っている、愛するひと、あなたはまだ出発もしなかったことを。だって、わたしのまわりのすべてが、わたしに言っている。あなたはいつも、わたしといっしょにいます。

お聴きいただき ありがとうございます。
また お目にかかるのを楽しみにしております。

うた／選曲・構成 峰 万里恵
ギター／プログラム作成 高場 将美

ホームページ：
<http://mariemine.web.fc2.com>